

水牛通信

VOL.6 NO.10
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす
水はたがやす
稲は音がなく育つ

「スター」日記⑦ 坂本龍一 2

日本最南端の島 稲垣豊 4

まだ芸能界周遊日記④ 鎌田慧 6

料理がすべて⑦ 田川律 8

本や人物往来記④ 笠原功三 10

たのしみがない⑦ 高橋悠治 12

名僧日記③ 高橋卓志 14

子供たち⑦ 柳生まち子 16

行ったり来たり⑦ 西山正啓 18

ブタ草は人の子 竹内晶子 20

現実の演技の強み 斎藤晴彦 22

ぼくが作った本⑦ 平野甲賀 24

わるいくせ⑦ 八巻美恵 26

下手の横吹き笛日記⑦ 西沢幸彦 28

友だちと呑めば本になる⑥ 津野海太郎 30

二点カット 柳生弦一郎

「スター」日記

8月10日、昨日モドキに咬まれた傷が痛むので医者に行く。帰宅してパッキング。7時、成田着。8時20分成田発JAL64便。

8月11日、午前7時20分、LA着。機を乗り換えマイアミへ。午後1時30分マイアミ着。ロビーで約1時間待たされ機内へ。食後に「幸せの黄色いハンカチ」を見る。上空からアマゾン（と思われる）が見えた。ブラジルの土は赤いレンガ色。午後10時39分サン・パウロ着、26時間の旅。ここらで日本時間からサン・パウロ時間へきり換える（ブラジル国内でも時差がある。）午後0時30分、シーザー・パーク・ホテルにチェックイン。先発隊と再会。小黑氏とラーメンを食べに行く。小黑氏は僕が来ることに半信半疑だったみたい。あんなに嫌がっていたから。仮眠して

夜、全員で食事。早速取材の為、ガスパレート氏を訪ねる。彼は大学の心理学の教授だが、画家の霊がつき絵を描かせるという。簡単な紹介の後、パフオーマンズが始まる。すごい速さで次々と絵が描きあげられていく。あつげにとられて見ているうちに十時間に15枚程描いて儀式は終わる。記念撮影して退散。何て日なんだ、昨日まで音響でシコシコやってたのにブラジルでオカルトを見てるなんて。ホテルのあるアウグスタ通りはサン・パウロの目ぬき通りといわれる所、なんと交通遮断してオカマのカニバルをやっている。何て所だ。やはり今日はとんでもなく長い一日だった。

8月12日、7時半起床。8時ロビー集合、空港へ。9時半、ボーディング、ブラジリア経由マナウスへ。約1時間でブラジリア着。1時間半待たされマナウスへ。午後2時半マナウス着。ここはフリー・ポートなので外国と同

じカスタムのチェック。カメラ、レコーダーの商品番号を控えられる。サンパウロと時差1時間。上空から見たアマゾンはアマゾンではなかった。アマゾンは海のように広く対岸が見えない。しかもエイやサメやイルカまでいるという。ホテルの横では土地の子供達が海（河）水浴をしている。完全に海だ。夜、アマゾン料理を食べぐっすり寝る。

8月13日、ホテルの蛇口からはアマゾンの水が浄水されずに出てくる。知らず知らずがいがいしてしまった。今日一日撮影だ。まずアマゾネス劇場。午後は港から水路に入っていく。雨期の後の増水の為、木が河からつき出ているアマゾン特有の風景。インディー・ジョーンズのように森林に入っていくと、木には人喰い蟻、タランチュラ、カスーの下にはピラニア、おまけにカスーの上には撮影用の大蛇という地獄が待っていた。日の沈む6時頃までたっぷりカメラマンの内藤さんに付き合われる。

8月14日、アマゾン後にしてリオ・デ・ジャネイロへ。ホテルはあの有名なイパネマ海岸のまん前。天気が悪い。8月15日、雨。午後、ひどい下痢。雨が霧雨に変わる。夕方、写真スタジオで黒人女性二人と撮影。ホテルに帰りブラジルの人気モデルといわれるロベルタ・クロウゼに会う。彼女は男だ!! ロベルタと一緒にヨット・ハーバーへ。大型ヨットの上でパーティー。リオのファッション関係者等30人ばかり一向にもりあがらないままお開き。帰って寝る。

8月16日、雨。一日中だらだらと部屋に居る。「マインズ・アイ」を読み3枚絵葉書を書く。

8月17日、9時、ホテルの前の海岸で撮影。オレンジ色の合羽を着た黒人の集団が海岸掃除をしている。今日も雨。11時半リオ発、午後0時半すぎサン・パウロ着。ブタントン駅研究所に行く。ブラジルには戦争がなかったの街並

が古く汚ない。5時半、記者会見。7時ドン・クロドスペイン風伊勢エビを食べる。10時、めかしこんでサン・パウローナウといわれるデイスコに行く。ひどい。うす汚ないガキとスノッブなバカ達。あきれすぎて帰り寝てしまう。

8月18日、午後1時半、インタヴュー。のはずなのにインタヴューが来ない。ブラジルだ!!市内の墓地で撮影。夜はイタリアン・レストランで食事した後、ジョージという日系人の誕生日に呼ばれる。これもしよばい。やはりブラジルしている。話がオーバー、約束を守らない、都合が悪いと逃げる、これがブラジルだ。似た様なものだったりして……。

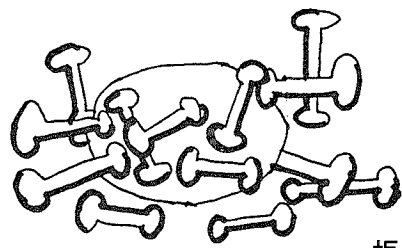
8月19日、目覚めると午後3時。パッキングしてから全員で早いディナー。8時半、ホテルを出、空港までたっぷり1時間。

8月20日、午前0時5分、サン・パウ

ロ発JAL61便。8時40分マイアミ着。LA時間午前10時5分LA着。買い物。機内で朝日新聞を見る。まるで戦前の新聞の様に感じられる。成田への途中、機内に病人がでて、機はアンカレッジへ。アメリカ大陸を縦断。

8月21日、午後8時10分成田着。30時間の旅。10時、帰宅。日本は熱帯夜が続いている。頭がボーンとしていて。もう一度ブラジルに行くことがあれば都市を素通りしてパンタナルへ直行しよう。

坂本龍一



日本最南端の島

有人島では日本最南端の島、波照間^{はてるま}は、沖縄本島の西南約四二九キロメートル、石垣島からも四二キロメートル南方に位置した絶海の孤島である。与那国島同様、よく晴れた日には、台湾もときおり遠望できる。しかし見た人は数少ない。沖縄戦で空襲をほとんど受けなかった波照間島には、戦前から赤瓦葺きの家がまだ残っている。周囲一四・六キロメートルのこの島は、北（喜多）、南、前、名石、富嘉（外）の五つの部族からなり、世帯数二二六世帯、戸数二〇八戸（昭和五年五月現在）人口七四三人（昭和五年八月三日現在）である。

この波照間の住民を第二次大戦中に西表島へ強制疎開させ、マラリヤで多くの人がなくなる原因を作ったのが、山下虎雄特務教員（当時）らであり、

現在左記の如き抗議書が出されている

抗議書

山下 虎雄

酒井喜代輔 殿

酒井 清

あなたは今次大戦中から今日に至るまで名刺をいつわり、波照間住民をたまし、あらゆる謀略と犯罪を続けて来ながら、何らその償いをせぬどころか、この平和な島に平然として、あの戦前の軍国主義の亡霊を呼びもどすように三度米島したことについて、全住民は満身の恐りをこめて抗議するものです。

あなたは、今次大戦中に学校の教師の仮面をかぶり、また国民を守るはずの軍人を装いながら、島の住民を守るどころか住民を軍刀による抜刀威嚇によって極悪非道極まる暴力と横暴をふ

るまい、軍の命令といつわり、島の住民を死地マラリヤの島へ医薬品等皆無のまま強制疎開させ、全島の家畜を日本軍の食糧に強要させ、全島を家畜の生地獄にさせ、またその後は食糧難とマラリアで全島を人間の生地獄にさせ、そのために家系断絶や廃家を続出させたほどの悲憤の歴史的事実を、あなたは忘れたのか。

我々住民はこの平和な島の歴史に、たとえ戦時中といえども、あなたの謀略による極悪非道な犯罪とその傷痕はこの島の歴史の続く限り忘れられることはできない。

当時、あなたの犯した行為は、あなた自身がよくわかるはずだが、あなたの書かせた秘密戦史③「陸軍中野学校」（昭和四十六年発行）の一九七頁より二一三頁の内容はあなたの良心のひとかけらも疑われるように事実を曲げ、悪の限りをつくした非人道的な行為を反省するどころか正当化しようとする魂

胆は卑怯千万の最たるものであり、全住民は怒り心頭に達し、絶対承服できるものでない。如何に言葉巧みに合理化し、その責任を逃れようとしても歴史的事実が真実であり、あなたの卑劣極まる謀略手段をつくしても、住民一人一人の脳裡に深く焼きつく傷痕は消えるものでなく、また真実を曲げて報道することは歴史に逆うものであり、断じて許しておけない。

あなたが三度米島したことは、その犯罪を正当化し、真実を曲げるためのものであり、住民を愚弄する甚しい。また、あなたが戦前と変らず軍国主義の謀略の手先となって暗躍するあなたの正体を見ぬき、再びこの島の平和を乱すものであることを考えると、我々住民は悲憤の涙をのんで亡くなった方々や我々の子孫のためにも、その謀略を再び許してはならないことを決意し、ここに全住民は満身の怒りをこめて、あなたの来島を嚴重に抗議する。

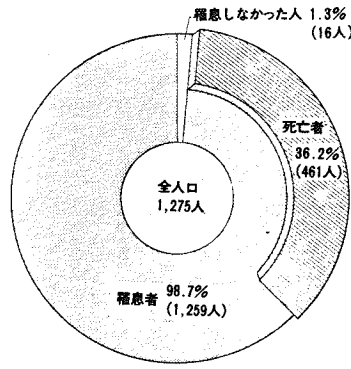
尚、今後我々の抗議に逆って米島するようなことがあれば、如何なる事態が発生しようとも我々にはその責任を負えないことを申し添えます。

昭和五六年八月七日

波照間公民館長	浦仲 浩 印
公民館役員	石野 友三 印
公民館役員	越地 信一 印
公民館役員	加屋本正一 印
竹富町議会議員	崎枝 政幸 印
竹富町議会議員	仲底 長幸 印
竹富町議会議員	東盛 弘佑 印
北 部落代表	野原 宏栄 印
南 部落代表	加屋本善一 印
前 部落代表	金武 久吉 印
名石部落代表	波照間 徹 印
富嘉部落代表	安里 正 印
波照間老人会 長	仲白保幸助印 印
波照間老人会副会長	貝敷 文雄 印
波照間婦人会 長	新盛 シゲ 印
波照間婦人会副会長	波照間シゲ 印

波照間青年会 長 内原 正男 印
波照間青年会副会長 後富底周二 印
波照間区長 東迎 正夫 印

なお、波照間におけるマラリア被害の
実数は左記の通りである。



波照間におけるマラリア被害
(昭和20年当時強制疎開させられた人)

まだ芸能界周遊日記

8月16日 練馬文化会館。東映映画「Wの悲劇」主演の葉師丸ひろ子の劇中劇の撮影。その見学。舞台正面の二階に通じる踊り場。部屋の中から「キヤッア」の悲鳴が長くつづき、若い女性が飛びだして叫んだ。「あたし、殺してしまった。おじ様を殺してしまつた。」

舞台の袖で扇風機を操作して蒸気の煙を送っている女性に、「あの女優は誰ですか」ときくと、葉師丸ひろ子だつた。どこかの新劇女優かと思つた。おなじ舞台にたつていても、三田佳子などはどこからみてもまごうことのない女優である。

しばらく様子を眺めて帰る。客席をうずめていたのはエキストラ。葉師丸のTシャツをもらうために集まつてきた連中である。その間に「仕出し屋」から来た本物のエキストラがそれらしい恰好で坐っている。カーテンコール

の拍手をくり返すのが仕事である。彼らは拍手の合間にインスタントカメラで葉師丸の写真を撮っている。

8月17日 日本テレビの喫茶室で、「今夜は最高」のディレクターとおしやべり、夜はCBSソニーの同級生と軽く一杯。先日のオーディションに合格した女のコたちは、それぞれプロダクションにひき取られたという。レコード会社とプロダクションは先行投資し、回収のゲームがいよいよはじまる。8月18日 フジTVでオールナイトイブの「おかわりシスターズ」三人娘と会う。TV局のまわりには、彼女たちを追いかける青年たちがたむろしている。町工場の労働者が多い。土曜の夜と日曜の朝。イギリスの怒れる六〇年代と日本のなにも起らない八〇年代の青年を対比して、しばらく感慨にふける。

8月20日 東映撮影所。仕事の終わった葉師丸を取材するはずだったが、五時終了の予定が十時になつても終らず、

諦める。喪失したあと、アパートに帰つてからの演技が、未経験の彼女に難しかったようである。

8月22日 午後から深夜まで、フジテレビで「おれたちひょうきん族」のスタジオリング。

8月23日 期日新聞が常用する旅館で葉師丸取材、終つたあと、彼女は晴海から角川書店創立十周年のファンサービスの船旅に出発。

夕方、江戸川区の工場地帯で、自動車修理工の取材。彼は土曜の夜、オールナイターズを追っかけるブラザーズの責任者である。

8月26日 朝日のビデオで、借りてきた葉師丸の映画「野性の証明」と「セーラー服と機関銃」を見る。「セーラー服……」の監督は才能ある。

8月28日 NHKに行き、友人から市川猿之助の写真集を二冊借りる。

8月30日 TBSのスタジオに行き、萩本欣一の脚本集団「パジャマ党」の代表者に合う。

8月31日 朝、新宿駅東口の「アルタ」に行き、「笑つていいとも」見学タモリと10分弱のインタビュー。

9月3日 中野駅ちかくの堀越学園取材。この芸能活動コースは、ジャリタレの救済学級である。夜、日比谷のILO事務局で、訪中団の打合せ。

9月4日 朝七時三四分のひかりで京都へ十一時から南座で市川猿之助の「義経千本桜」見学、夜取材。

9月5日 南座に一日いる。

9月6日 午後四時半、京都発の新幹線で帰京。家に帰って荷物を整理。深夜、成田のホテルに入る。

9月7日 八時五五分発、北京へ。一行はそれ担当の記者、編集者、評論家など三二名。最年長者は六九歳。平均年齢五五歳とか。十二日間三五万円

空港の食堂で昼食。青島ビールがうまい。出迎えに来てくれた若い通訳はこのツアーが敦煌まで行くので喜んでた。中国人でも、よほどの用事がないと行けないらしい。

三時半から中華全国总工会本部で同会副主席などと懇談。賃金以外に「報償金」が大きなウエイトを占めている。この刺激策で近代化に馬力をかけているらしい。

企業の経営は、労働組合とは別組織の「従業員代表者大会」で方針を決める。基幹産業以外では、社長を自分たちで選ぶ。社長の裁量権は国家、党の直接指導を外れて大きくなり、生産性向上運動がすすんでいるらしい。

夜、人民大会堂で歓迎宴。
9月8日 国家経済委員会（通産省と経企庁のあいの子）の新主任（次官）と懇談。現代中国の課題は、「対外解放」と「体制改革」とか。つまり、「自由化」である。

三年前、北朝鮮への往復のため北京に立ち寄ったことがあったが、町の雰囲気はそのときよりもまだ明るくなっている。

午後、故宫（紫禁城）見学。中国人観光客がゾロゾロ。二眼レフのカメラ

を首からぶら下げている青年が目立つ。街頭写真屋も多い。驚くべきほどに巨大な城だ。

夜、訪中団からの総工会と経済委員会への答礼の宴。北京ダック。

9月9日(日) 万里の長城へ。ここでも観光客のラッシュ。その中で日本人、アメリカ人、香港観光団が目立つ。暑いので人民帽を買う。露店で四元（四百円）通訳の青年は、町の店で買うと二元だから、買うな、というが、まあ、二百円の差だ、と買ってしまう。よそで買ったメンバーは三元。毛沢東が星となつて輝やいている大きなバッチがついている。かつて紅衛兵だった通訳青年は、「いまはこんなものはないはずだが」と気にしている。あのころ、大量にバラまかれたものが、いま人民帽のふろくとして外国人に売りつけられているのである。（以下次号）

鎌田慧

料理がすべて

〈今月の外食〉「びっくり寿司」(自由が丘) トロ、アナゴ、オドリ／「近鉄大飯店」(銀座) マーボ豆腐ライス、シューマイ／「吉田屋」(銀座) 天ぷらそば／「ぐ」(下北沢) ヒジキ、豆腐イタメ、春雨／「大陸」(新宿) 蒸ギョーザ、ニンニク茎イタメ、春雨サラダ／「ひさご」(神保町) ぶるぶる(豚肉をイタメたものをカラシ醤油でたべる)／「かなざわ」(荻窪) 肉じやが、ハム+アスパラのサラダ／「陶玄房」(新宿) イカメシ、キンメ鯛粕漬／「おととと」(下北沢) イワシ煮、茄子イタメ、マツタケご飯、芋のニッコログシ／「ボルツ」(中野) チキン・カレー(五倍)／「多か浜」(築地) カツ煮定食／「紅池」(渋谷) 鉄火井／「山本屋」(名古屋、今池?) 味噌煮うどん／「味仙」(今池) 台湾

ためる。好みて今は比較的安いミヨウウガの細切りを加える。タイからカラワンのモンコンたちがすごく辛い一味をお土産に持ってきたのをオスソワケしてもらったがあるので、なににでも入れる。ここにも加え、そこへ先に作った豚ヒキのアンをかける。⑤ヘンタイ卵焼き。今回はかつお節とタイの一味で。⑥松茸ご飯。店頭でさんざん迷って、ちっこい松茸で松茸ご飯をたいた。米を洗いザルにあげ、水、醤油、つづ一片、しょうちゆう(？) 大胆かな)をまぜて米と等量作り、米とこの汁を炊飯器に入れ、その上にちりめんじやくと松茸の薄切りをテキトウに加えてたいだ。とてもうまくいった。⑦ウシオ汁。キンメ鯛のアラを買って、友人の引越しパーティーでアラ煮を作ろうと思つたら、ナ、ナント二十何人も来るといので、コラ、アカンワとウシオ汁に変更、なに、水をいっぱい入れて、そこに酒を加え、くだんのアラ

ラーメン／「？」(名古屋) カレーうどん、メシ／「？」(京都 五条) お好焼／「ピッグノーズ」(鳥丸五条) メンタイ・スパゲイ／「イノダコーヒー」(四条大丸横) フレンチメースト／「山本屋」(錦小路) キツネうどん、メシ／「？」(捨得近く) かやくご飯／「ほんやら洞」(寺町今出川) カレー／「？」(大阪、関西テレビ傍) うどん定食／「？」(大阪、プガジャのビル1F) かやくご飯／「？」(長野県諏訪湖サービス・エリア) トン汁定食／「南雲」(渋谷) ジャジャ豆腐定食／「ワンス・アポナ・タイム」(山梨 甲斐大泉) 肉シチュウ風、見柱としめじバター蒸し、サラダ／「同前」トリのホワイトクリム、鮭フライ／「中村屋」(渋谷) ブリ照焼、茄子煮、カボチャ煮／「しばや野郎」(六本木) お好み焼、タコ煮、イカぬた、マグロトロロ。

を入れて、煮たつたらアクをすくい(珍らしいことをしたものだ。自分だけ食べる時はこんなことはゼツタイにせん) 塩と少々と醤油で味付け。三つ葉は高いので、カイワレを投げ込んだら火を止め、スタチの皮を刻んでオワンに入れたもの(といっても当日は人数が多かつたのでコーヒー・カップを使った) についだ。

へうどんとかやくご飯なぜ関西に行くとうどんとかやく飯を食べることが多いのか、9月14日から18日まで、歌手の豊田勇造、キーボード奏者の佐山雅弘と名古屋、京都、大阪を旅したが三人共に関西の出身者のせいか、名古屋についてから、ともかく「飯にしよう」というと、うどん屋に入って、うどんかかやくご飯を食べた。うどんは関西が色の薄い汁、名古屋は味噌がうまいが、これはふだんの東京ではないもの。かやくご飯も、東京のうどん屋

東京では今はほとんどうどんは立

き、トリ腿肉をブツ切りしバターでいため、そこにイモ、ニンジン、玉ネギを入れ、ワインを加え、煮たあとにルー、一味唐辛子などをたした。②変り冷奴。シヤンペンの和子さんとこで覚えたもの。すでに本誌で紹介済みだがこれは誰にも好評で、それまでのぼくの奇妙な冷奴にとつてかわり、機会があれば作るようになった。念のために一度書くと、ニンニク、シヨウガ、生のピーマンをたっぷりみじん切りにしそれにかつお節を加え、ゴマ油、醤油をかけてまぜ、これをサイの目に切つた木綿ごしの豆腐にかける。③コンニヤクとかつお節煮。これもなんの変哲もないコンニヤクとかつお節をからめて醤油、酒、一味唐辛子で煮たもの。④茄子のひき肉あなかけ。豚ヒキ肉をニンニクのみじん切りと共にいため、砂糖、醤油で甘辛く味付け、カタクリ粉でトロ味をつける。茄子はぶつ切りにしたつぷりのサラダ油+ゴマ油でい

喰いどん屋しかない——にはない。

〈今月の驚き〉9月6日、お茶の水にいて、一連の「廻る寿司」チェーンのひとつ(元禄でもコマでもなかった)に入った。カウンターの上部に湯呑みが並べてあり、手に取ると軽い。はて、と覗くと、ティーパックが入ってるだけ。何か所かあるお湯の出る蛇口でお湯を満たして「あがり」にするのだ。坐ると、すぐに伝票が来る。そこへ、これも何か所か寿司の血の乗ってくるコンベヤ上部に、郵便局や銀行にある「ひもつき」ボールペンが揃えつけてあって、それで自分は何円の皿(百円と二百円しかない)を幾皿食べたか記入して、出る時にその分を払うのだ。他日別の寿司屋のオニイちゃんに聞いたら、そういう所は、寿司の飯を自動握り機(?)で握るといことだ!

田川律

本や人物往来記

8月15日(木) この原稿がのる頃には、きつと涼しくなっていて、もしかしたらセーターでも必要なくらいの気候かもしれない。でもおくれればせめてはあるけれどどうしても書きとめて少しでも整理しておきたいので、わが家の夏休みの最終日の様子をお届けします。以前に新聞屋のおじさんからもらった西武園の入園券十乗物無料券2枚+セツト券割引券2枚+ユネスコ村入園券(2枚つづり)をもって、昼間はきつと混雑しているだろうからと夕方涼しくなつてから出掛けることにした(夏場は夜9時迄開園)。ついてみると、どうしてどうして混んでいるみたい。『波のプール』(人の波だから?)が今年開設のため入口が新設されているのですが、『流れるプール』とその入口は、『流れるプール』から流れてきた人た

ちを、夜9時迄開いている遊園地へと誘う実によくできた入口なのです。正面入口よりも近いので我々もそこから入る。入場口付近の人も、園の中で遊戯物を操っている人たちも、ほとんどが学生アルバイトか、高年齢者で退職後の第二の仕事、といった風だった。場内は2年位前に来た時にくらべると随分と変っていた。路面がきれいになり、ところによっては模様タイルが貼られ、しょうしやで可愛いらしい建物やワゴンがいっぱい並び、夏場だけの出店も多かった。アメリカから輸入したか範を採ったかの、メリーゴーランドにまず乗る。ウォーターシュートへいっても、観覧車へいっても、暗くなっているというのにどこも人の列。それでもめげずに並ぶ。折角来たのだから東洋一の観覧車(それとも世界一?)に乗りたい、いや乗せたいと、はかなく、わびしい親心で待つ。横を見やると立て札がたっていて、『この位置で

の待ち時間10分』とある。全く恐れ入ります。10分ぐらいいんだと、じっとしている事が嫌いなこともをなだめながら、ひたすら待つ。いったい子どものためにきているのか、親のためになっているのか、それとも観覧車のため?それから乗物回数券を購入した。(12枚つづりで千円、一枚は百円券。しかも新聞屋さんからもらったセツト券割引券があると、何んと八百円なのです。買わない手はない。)せっかく来たのだし、最後の休みだし、たくさん乗ろう!と誰に言われるともなく自然に促されて、気がついてみると相当つぎこんでいた。それでもまだ満足気でない長男。まあそれなりに楽しそうではあったけれども、やっとあいた緑台に陣どつてお弁当をひろげる。実に、陣どる』という感じなのだ。近くの売店では、栗おこわ、おいなりさん、アイスグリーンティー、麦茶、いかの照り焼、焼きもちこし、等々……:あたかも池袋

西武の地下食品街にでも来たのかと思つてしまう程。なんかこう、もう至れり尽くせりつて感じで尻が落ち着かず、早々と食事を切りあげて、又乗り物へ切りがないのだ。ただただ歩き回り、乗つて、飲み喰いして、くたびれて、そしていまひとつ釈然としない思いで、帰路をいそぐ。長男は本当に楽しかったのだろうか。ドイツニーランドには連れていけない資力と気力の親をどう思ったか。私は又しても素直な消費者になれなかった。

8月24日(金) 西田書店へ行く日高さんが『やれ文化だ思想だ』って言つたつて、体を張らなきゃならない国に較べたら、日本なんて安楽で天下泰平だねと。

8月30日(木) 閉店後古谷さんが熱海から電話をくれた。『流行通信に載つてるヨ』と。10時頃今村さんがみえて今年の冬は大有給休暇をとつてエジプトに行くのだと鼻息が荒い。いまのうち

にいろいろな文化遺産をメディアを通して、自分の目で見ておきたい、とのお話でした。お客さんというのは本当に嬉しいものです。

9月1日(土) 筑摩書房から香月泰男の『私のシベリヤ』が出た。凄いエッセイ集だ。もちろん絵も凄い。単行本二冊分入つて千四百円なのだから文句のつけようがない。売れるといいのだけども、中でもアルチザンとアルチスト、つまり、職業として絵かきを選ぶ者と人間の生き方として絵を描くことを選ぶ者というあたりは、ひととなりを感じられて、まいてしまふ。

9月14日(金) 援農に出掛けた女房が、お札にニラの花とすいかをもらつてくる。八百屋ではあまり見かけないニラの花だけど、香ばしくて歯ざわりもよく、口の中でプチプチとはじけて、おいしかった。こういうおいしいものが出回らないのは、流通の効率化のためか?

9月15日(土) 『ブックパワー』(女性ばかりの本の販促会社)の小山さんと柳ヶ瀬さんがみえて雑談。来年2月に数人で東南アジア・インドのスラムツアーを計画しているので行かないかとの誘いをうける。

〔お知らせ〕 10月からブックインの営業時間が変わります。正午から夜10時迄営業。定休日は毎週月曜日と第三火曜日です。ご来店をお待ちしております。

(住所) 杉並区阿佐谷北4の6の27
(電話) 330-7897

笠原功三

たのしみがない

……などと、いつてはいられないんだ。秋ともなると、いろいろなコンサートをやりながら、水牛楽団をどうしようか、三宅榛名と2人のコンサートで何ができるか、この二つのために、つかえそうなことをあれこれためしてみる。

坂本龍一と浅田彰が「休業・水牛楽団」というカセットブックをだしたので、ますますやりにくくなった。かれらが解説し、予知している針路にすすみたくはない。とおもうほどに、そこにおちこみそうになる。カセットのなかみは、半分以上が如月小春でできているのだ。彼女の新作「MORAL」では、水牛といっしょにやったことがはるかに徹底して、方法として見えるほど発展しているのを見ることができた。

そうなりたいたがなれないものだから、かれらをたすけることで、自分もいっから旅芸人に近づくのだ。人びとの自由へのおもいをせおって放浪する人たちだ。自由に生きるということとは、もだちがいるというのおなじだ、とかれらとつきあつて発見した。もつてきたあたらしいレコードは、2人だけでストラチャイのつくった歌をやっている。ギターとビンに、ときどきサンポーニヤや胡弓をいれて。

スワンニー・スコンターのための歌がある。スワンニーは小説家で、女の雑誌の編集長だった。自由な女で、ひとりどこへでもいった。今年、市場に買物に行く道で、あそぶカネがほしい二人組に車をぶつけられて殺されてしまった。

どうしたらよいか。道の上では生きられず、定住するのもしやだ。一歩ふみだしかかって立ちすくんだまま。崎元譲のためにハーモニカの曲をか

水牛楽団の手もちはエスノ・ハイテクでも、アンドロイドでもなく、あてにならない楽器とたよりにならない技術のいいかげんなくみあわせてしかない。それで、どこがよいかわからないが、ひっかかってぬけだせないもの、つまづきの石をおこうとたくらんでいる。こんなブラックホールは、まともにかんがえだすわけにもいかない。見ないふりをしていないと、見えない。とりあえず、手もちの楽器をためし

てみる。NHKテレビの「アジアの旅芸人」のために、ハルモニウム、ケーナ、トイピアノがわりのチェレスタ、リュートがわりのチェンバロ、鳥笛、小さな打楽器で、くりかえすパターンと変化するパターンをゆるいくみあわせ。

豊住芳三郎とDUOで北海道をまわった。電気大正琴にデジタル・ディレイ、スライド・ホイッスル、タイの笛をピアノ以外につかかって、フリーの

いた。いい演奏だった。だが、かこうとおもったことはなにか、ちがうものをかいてしまった、ということがわかった。如月小春と合唱団のための作品をつくったが、「MORAL」でおなじ詩が集団のリズムのなかからきこえてきたとき、彼女のかんがえていたことがはじめてつたわってきた。こちらのしごとは、彼女のことばをカオスのなかになげこんでこわしてしまっただけだった。どこまでいっても失望だ。いつまで耐えていられるか、だ。

高橋悠治

コンサートのお知らせ

- 1 水牛楽団「カラワン歓迎コンサート」 10月27日(土)7時、28日(日)3時、渋谷ユーロスペース。水牛楽団として矢川澄子の「小兎のお嫁さん」を作者と共演。吉原すみれ+高橋悠治「のづ

即興。ぎこちなくリフにもどる。ピアノはどうしても音がおおくなってしまう。感情なくキカイのようにひくか、それとも草の葉のように。モード風に、あるいは音のオブジェやプリペアドピアノ風に、つかう音を制限してみても、ピアノはまずしくひびくだけだった。外側から枠でかこつてしまうことと、中心や出発点としての約束ごととはちがう。そのどちらでもなくて、とびらのような構造をつくれないうだろうか。外にも内にもいくことができて、ひらいているときには見えないようなもの。ストラチャイとモンコンがやってきた。三里塚の小泉さんによまれて、東北から沖繩までの農村をまわる三箇月の旅だ。それまでここにとまって、夜おそくまで酒のみ、昼はレコードをきいて、歌をつくつて、楽器をひいている毎日。どこでも自分の家で、どこにも家がない。もだちがどこにもいて、たすけてくれる。かれらを見ていて、

ちのうた、三宅榛名のピアノ自作自演、斎藤晴彦の歌「ポロネーズ」など。カラワンはストラチャイとモンコンの2人であたらしい歌をいくつか。

- 2 東北の旅にでるカラワン以外、おなじプログラムで11月4日(日)3時、八尾西武百貨店ホール。
- 3 三宅榛名+高橋悠治「モーツァルト・モザイク」 11月6日(火)、京都府立文化芸術会館、たぶん7時。二台のピアノなどで、モーツァルトから「いちめん菜の花」までいろいろ。

- 4 三宅榛名+高橋悠治「音楽器械モーツァルト」 11月13日(火)7時、中野文化センター。こわれかかったモーツァルトの機械音楽と、切りぎざまれたベートーヴェンと、機械でなく、音ですすビオ・メハニカ。

名僧・日記

九月一日 今年の六月、私の寺で接心会（修行）をした。「きもの研究会」のメンバー（もちろん全員が女性で、ほぼ全員が未婚で、まあまあ若くて、その内何人か数える程が美人で……）約三十名がやって来た。六月は、丸三日間（禅宗の）専門道場での日課をそのまま取り入れて、けっこう厳しく坐禅に作務（しむ）にと指導したのだった。その後、修行の様子を、きもの研究会の女ボスト、メンバーの中で一番美人（というかTV映りがいいだけというか）の女の子が、NHK教育TVの「この時代の」とかでおしゃべりしたため、若い娘が修行できる寺とか、若い女性をとりこにするステキな坊さんがいるらしいといった評判が全国にネットされ急に有名になってしまった。しかし本当のところは、今まで娘共が大挙し

て来たことなど一度もなく、来るとすれば、信州大学の決してカワイイとは言えないムクツケキ野郎共か、企業研修で無理やり寺に送り込まれた学生あがりの青ビョウタン社員でしかなかったから、この革命的事態に、胸がドキドキ、思わずニヤニヤしたりして、まるで突然「チエツカーズ」になったみたいでどうもいつもの調子がでなかった……という記憶がある。今回は、六月の修行のリターン・マッチとなったわけだが、その内容たるや相当なもので、他言はかなりはばかるが、寺の中庭でジーンギスカンパーティーを催したり、（この企画は全員で決めたことでは私はずいぶんいじりすぎなので、藤本徳次中劇社長所蔵のSPレコード（数千枚という驚異のコレクション）と、見事に手入れのゆきとどいた箱型チクオンキによる本堂でのレコードコンサートをやるといった調子で、「寺」の本質が問われたり、大本山と

いうところからおしかりを受けそうな企画ばかりである。

とはいっても、去年の今頃は、カラワンと水牛のコンサートの後、我が寺の大広間で五十名ものキチガイどもが大酒をのんで、「うなぎおどり」なんかを踊り狂ったのに比べれば、アカデミックでおとなしいかぎりではある。セピア色がかった「冬の旅」「春の海」最後は「金五郎」の落語とおちが付き、例の如く酒を飲み、最後に寝酒で仕上げておひらき。

九月二日 前夜たっぷり飲ませておいて五時にたたき起こす。この快感がたまらない。五時半から朝課（朝のおつとめ）六時より坐禅一炷、六時半より暁天講座。講師は、東京三田龍源寺の松原哲明師。話しのうまさでは定評がある。山国育ちの娘さん達、東京弁のはぎれの良さに魅了された感じ。二ヶ月に一回はこの暁天講座をやっていたい。ついでにジーンギスカンパーテ

イも。

九月五日 福祉と教育を考えるシンポ。題して「この流れをどう変える」シンポジストは、グラスルーツの播磨靖夫氏。スウェーデンから柳沢重也氏。信州大学の山本哲士氏。そしてお馴染み西山正啓氏。主催は全国的に有名な障害者の共同作業所「筑摩工藝研究所」と、全く知られていない月刊「ちくま」編集室。このメンバーを見るだけでこのシンポの面白さはすぐわかると思うが、詳しくは月刊「ちくま」十月特集号を参照のこと。編集長は私デス。シンポ終了後、我が寺で取り巻きが集まり宴会。西山、播磨、柳沢の各氏はお泊り。山本先生だけが、ミシエル・フーコーの追悼集作りとかで帰宅。そのトタン、山本先生が酒の肴となつてしまふ。

九月八日 第三回松本ふれあい広場の前夜祭。夜店がでたり、盆踊りをやったり、花火大会をしたり。メインイ

ベントは、愚安亭遊佐の「下北百年語り」。これには今年の二月頃からかわつていたので、仕掛けてみたが見事にヒット！ ふれあい広場も、単に障害者と健常者の仲よくしあい、ではなく、教育、福祉、環境、平和、食の問題へと発展してきている。今回のシンポも、その一例といつていい。当分世話人やめさせてもらえそうもない。

愚安亭遊佐、山口県社協からの視察組、友人の放浪画家、小川安夫さん夫妻、それにいつもの連中で、また宴会。九月九日 ふれあい広場本祭。雨の中、六千人の人数。一応成功。おまつりを作りあげていくことは大変だが、何が起るかわからないから楽しくてやめられない。また来年やろうつと。夜はまたまたいつもの連中と祝宴。

九月十日 お地藏さんと犬と旅人を画いている重度の障害をもった放浪画家小川安夫さんが、広場に参加してくれたので車で軽井沢まで送っていく。

途中、小諸の「べにや」でそばを食べ、故堀辰雄さんの別荘へ寄る。奥さんに会いお茶をいただく。

九月十四日 八時五十分、猛烈な地震。本堂はすごい被害がでたが、松本はどうもなく、我がボロ寺も無事。お見舞いはいりません。

何のかんのと毎夜お酒が続いた一ヶ月でした。こんな坊さんらしからぬ生活から早く足を洗い、精進なる生活をさしてください。皆さん！

高橋卓志

バスがとまって、ぴよんと飛び出してきた女の子がちよつとかわいいおデブちゃんだった。色白のおかっぱ頭の、大きい体だけど、2年生くらいかな、顔がおさないから。横断歩道を渡って、坂道を登って、私の前を歩いていく。

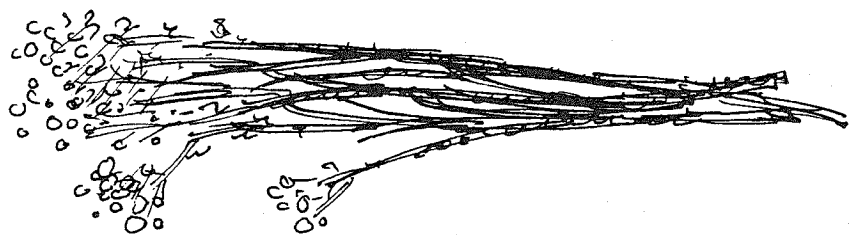
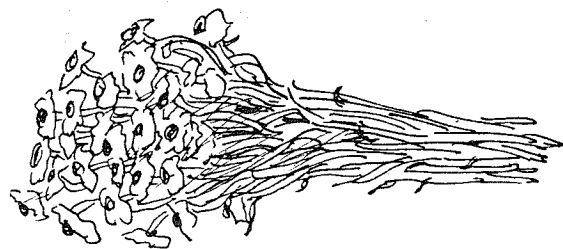
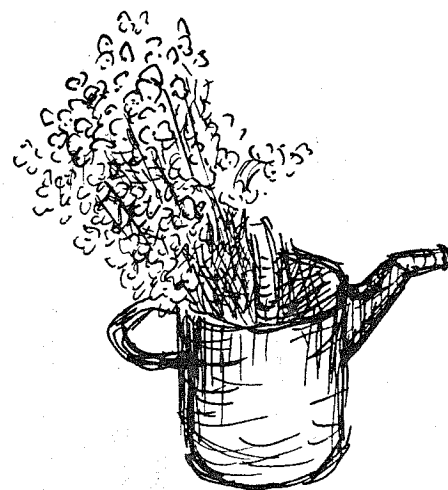
おデブちゃん、おデブちゃん、学校でやっぱりそう言われたりするかな。心の中で思ったら、うしろをふり返って、私を見た。

お母さんは何か言ったりするかな。でも、ポツチャリ具合がともかわいいから、お母さんはやせなさいなんてきつと言わないよね。またふり返って私を見た。

気に入らない？ おデブちゃんて言うからでも、かわいいって言ってるじゃない。またふり返った。

かわいいよ。かわいいよ。かわいいおデブちゃんは角を曲っていった。さようなら。

私の思ったこと聞えたのかな。



行ったり来たり

八月二十五日 田無のにんじん文庫が主催する夏祭りデイズニーのまんが映画とウルトラマンの野外上映をやる。駄々広い原っぱの真ん中にスクリーンを張り、ゴザを敷きやぶ蚊と格闘しながら多勢で映画を観るっていうのはやはり何とも言えない。最初、何人位集まるかちよつぱり不安だったが、始まってみると来るわく、大人と子供を合わせて百二十人位集まった。当然の事ながらゴザからはみ出した人が多勢いて原っぱは立見の客で溢れ？ていた。あとのスイカ割では予想外の人出で用意していた数では足らず、仕方なく同じスイカを子供たちが寄ってたかってボカスカ。スイカ割ならぬスイカくずしの一幕でした。

今度、みんなで野外上映会を企画しませんか。

てな具合。ほんまに悪いこと出来まへんなあ。

夜の神宮寺（高橋さんのお寺）は色んな情報飛び交い、それはそれは賑わっております。

九月八日 学校解放センター主催の元氣ING・JUMPに映写技師として参加する。参加者は百二十人位だったが大半は中高生。昨年まで現役の高校生だった名古屋の藤井誠二君（オイこら？学校の著者）も来ていて、保坂氏とのやりとりは仲々面白かった。藤井君いわく、生徒が学校の外にたくさん友達をつくれれば教師も僕たちに対してうかつに手が出せない。教師の体罰を止めさせるには、その教師の行為を有名にしてしまうのがいちばんいい。それもそうだと改めて納得。どの世界でも同じだが内部告発がなければ実態はようとしてわからないことが多い。

九月二十日 またく主夫業の季節

八月二十七日 映画のロケハンで早稲田奉仕園の中にあるシャプラニールに行く。彼らの前身はHBC（ヘルプ・バンガラデシユコミティー）だから御存知の向きもあるかも知れない。メンバーは現地から送られて来るジュート製品を国内で売りさばき、その資金を駐在員の活動費と手押しポンプの据付けなどの農村開発費にあてている。事務所に行けばジュートバッグや籐カゴなどの珍しい品がたくさんありますよ格安！連絡先は二〇二一七八六三

八月三十一日 『泥の河』に続く小栗康平の第二作『伽椰子のために』を観る。上映中ほとんどリラックスすることが出来ない。そんな映画。一緒に観た藤沢市立村岡小の名取弘文センセいわく「一作目といい映画つくと二作目が大変だよなあ、みんなからいろいろ言われるもの、西山さんも、エヘ……」アトの言葉が聞きたかったのにナトセンめ……。

がやって来た。つれあいが齊藤次郎氏と一緒にイタリア写真取材に出かけたからだ。春先は運良く？僕に仕事があったから良かったもの、今度ばかりは完全に仕事重なってしまった。

十月六日は子供の保育園の運動会。ちゃんとした弁当をつくってやってよ」としつかり言い残されてしまった。おにぎりとういんナーソーセージと玉子焼と……あーあ頭が痛い。

九月二十二日 みたかたべもの村の教室の担当。新座の学童クラブ「風の子」と地域のたまり場「よろずや」のメンバーを迎えて。新座市の学童クラブで政党色のないのは「風の子」だけ、しかし、最近ではキョーサントウの人たちの攻撃が激しいという。ここは学童保育の場だから、子供にはちゃんとしたい、つけをして欲しい、あれをしてはダメなどの禁止事項がどんどん増える。地域の中の子供の寄れる場として、なるべく彼らを束縛くしないよ

早く二作目をつくる。

九月二日 世田谷雑居まつりの事務局会議に出る。撮影の承諾を得るためとロケハンを兼ねて。世田谷はほんとうに若い人たちが多い。少しわけて欲しいなあ。

九月五日 松本市の筑摩工芸研究所が主催する「福祉・教育問題シンポジウム」に、なんと！講師のひとりとして招かれた。

松本には昨年の二月に映画の上映依頼で伺って以来。今回は『水牛通信』が縁をとりもってくれた。僕が初めて本誌に書いた「子供に合っていない学校」を月刊『ちくま』の編集長・ひがんだぼんさんこと高橋卓志さんが読み指名してくれたとの由。人の関係はどこでどうつながるか分からない。ぼんさんも本誌のメンバーだからか、とても初対面のような気がしなかった。どうもく。いつもお忙しそうで……とこゝろで出稼ぎの方は如何でしたか？

うにと考えている、いまの指導員だから当然ギャップが生まれてしまう。

登校拒否の小学校に登校拒否の高校生がボランティアとして関わっている。そして、昼はふたりして仲良く弁当を食べている。つまり行き場のない子供たちが来れる場として「風の子」はあるのだと指導員の女性は言います。「よろずや」はさしずめ行き場のない大人のたまり場なのでしよう。

西山正啓

ブタ草は人の子

「砂漠の下真ん中に一人きりにされて、周りが全部高い高い壁で囲まれていて、その壁は絶対に超えたり壊したりすることが不可能だということがわかってる時、あなたはとうするか?」
ちよつとしたよくある心理テストの類いらしいが、何でもこれは、死に対する感情を意味することのこと。私はこの問いに対して迷わず、「目をつぶって眠ろうとする。」と答えた。うわー。おふとんの恋しい秋だ。

人には、ネコ型タイプの人とイヌ型タイプの人がいる、とよく言われるが、あれを決める基準は、布団に対する愛着度にあるんじゃないかと私は思っている。私はおふとんが好きで、夏でも布団を抱いて寝る。だから秋が来ると、ぐるぐる巻きのヘビになった肌掛けはほとんど使いものにならない。この趣

向はどうやら父親譲りらしい。もちろん布団にくるまってねむねむ……というのはネコさんである。秋が来るとどうもおふとんにくるまる機会が多くなるので、ついつい猫背になりがちだ。少しエビぞって眠る練習をせねば!

このところ、夜な夜な15センチくらいの蜘蛛が出現する。ペタペタペタペタという予想外の大きな足音で畳の上を駆け抜ける。関節だらけの枯枝みたいな足がぞわぞわ動くのだから、言うまでもなく鳥肌ものだ。だいたいいつも思うのだが、気味の悪い虫や爬虫類などは、こちらがいやがるのを知っていてわざと向かってくるような気がする。まさかね、と思いつながら、必ず追いかけられる。友人の下宿でブンブン飛ぶゴキブリに襲われたこともあるし、ひきがえるを踏まぬようにとそーつと歩いてたのに、そーつと踏み出した足の甲に音もなくひきがえるがボソツとのつかつてきたこともあるし、わざ

の緑太郎は、運動嫌いなやつだなあ、と思っていたら、いつの間にか本当に動かなくなつて、石のカメ吉になつてしまった。金魚やザリガニやカイコやメダカやおたまじやくしや——我が家の水槽や洗面器の中で、名前もろくにつけられずにずい分たくさん死んでいったものだ。六年くらい飼っていたお

しゃべりインコのピロくんは、最後の夜には狂ったように夜通しえさを食べ続けて、翌朝「キョッ」と鳴いて死んだ。インコの臉は午皮みたいに中が透けて見えそう、一ミリくらいいままつ毛がつんつくはえていた。

のら犬が恐くてピアノの稽古をサボってしまったら、友だちから一日だけ預った犬が帰ってしまったあと、ドッグフードをかじって泣きじやくったり大きな犬に追いかけられたりかまれたり、私が犬をなぐったり殺したり、夢では何度も体験している。

何も動物をかわいがる人ばかりがい

い人とは限らないんだ。私の場合、動物との想い出は、みな片想いだ。

このところ、絶好の運動会日和が続く。なのに、朝のラッシュアワーに目を血走らせて、空いた座席めがけて突進する毎日がまた始まってしまった。熟睡また熟睡。久々に夢。じとじと雨の日、地下鉄通路の壁にはりついてる私に音もなくすり寄って来る人影。「今月も原稿遅れそうだね、うふふ。」と不気味に笑う悠治さんと田川さん。うあ——!

電車で熟睡中に大地震がやって来たらどうしよう。ねぼけたままうまく逃げられるとは思えない。かといつて、まさか「目をつぶって無理矢理眠ろうとする」わけにもいかないし。

そういえば、不思議なことに、地震とか台風とかの大災害についての報道で、動物が登場することはまずない。動物園とか牧場とか、どうなるんでしようね。鳥かごとか犬小屋とかもね。

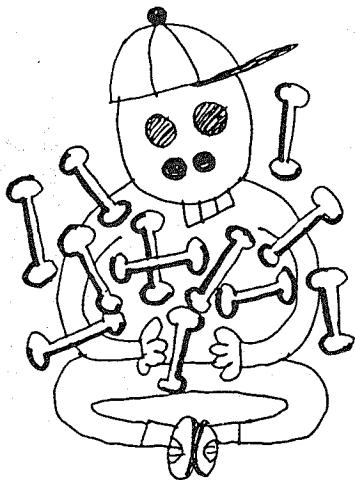
わざ私の足の下に飛び出してきたコロギをもろに踏んづけてしまったこともあった。パチーンという破裂音と共にペシヤンコにのびたコロギは不思議に表情が豊かなものだ。どうか、あの蜘蛛とは、これ以上素敵な想い出はつくりたくないから、もう出て来ないでね。

バイト先の家は、動物だらけである。きな粉もちみたいなハムスターから、おしゃべりインコや、巻毛のうさん臭いモルモット、ペルシャと日本猫の合いのこで白髪(?)が自慢のお嬢さん猫ヨークシャテリアの群に、私が行くたびに狂ったように吠えだてるシェパード等々。私の教え子は、たびたび動物たちの楽しい話をしてくれるが、正直のところ、テレビゲームとカラオケとお酒の好きな彼女のお父さんの話が一番興味深い。生きものたちは、ほとんど何を考えているのか、私にはよくわからない。お祭りを買ってきた緑ガメ

普段なら、猛犬が赤ん坊をかんだとか、虎が逃げ出したとか大騒ぎになるけれども。

私なんかより、動物の方がもっともつと片想いなかもしれませぬ。

竹内晶子



現実の演技の強み

プロ野球は、俺にはなんの関心も興味もないところが優勝を争っている。だから、俺のジャイアンツ症候群、江川イライラ病などは当分の間潜伏期に入ることになった。ヒステリックな日々から解放されて慶賀の到りだ。そして今は、秋たけなわという奴だ。俺の住んでいる安アパートの窓辺に柿の木があつて黄色く色づいた甘柿がたわわになつていて、間もなく俺に食われる運命に泣いている。ユオロギと一緒に。今月もずいぶん飲んだものだ。だから一つ、ヨーロッパ音楽について何か字を書いてみようかなあなどと脈絡のないことを考えながら、九月十六日に厚生年金ホールで聴いた、チェコ国立ブルノ・フィルハーモニー交響楽団のスメタナの「わが祖国」の感想の断片をつないでいたら、なんて、そんなにかっこいいものでもなんでもない、要する

来た。ずいぶん俺は評価されているんだ。俺に出来るわけないのに。でも、俺は、「面白そうですわねえ」とかいつちやつた。映画はとて面白い。監督は二十六歳のマノップ・ウドンジェという人で、一九七五年のタイの農村とバンコックの現実を、ま、二人の主人公、一人は貧しい農村から妻子を残してバンコックに働きに出て行く男、一人はバンコックの大学を出て同じ農村に農業に従事するために戻って来る男、この二つの人物が見えない糸でつながれて、一人は農業組合を結成し、作物を旧来の仲買人を通さずに売るべく闘い、仲買人と郡の役人たちに殺され、一人はバンコックの工場で働き労働条件の改善を要求する会合、集会に連座して牢に入れられるというはなしだ。で、殺された青年が信頼を寄せている村長とか僧侶、彼の母親、又、バンコックで働いている青年の友人達、仲買人や工場の経営者達など、玄人だか素人だ

に今月は結局とぼけちやうことに勝手にきめて、このまま、あの心優しい田川さんのテレフォンが鳴りませんようにと思っていた九月二十八日深夜のこゝと、来ました来ましたかかつて来ました。若干不気嫌な声ではあつた。きつと眠いんだ。俺ってどうして正直じゃないのだろうか。とてもじゃないが頭の中に字がないんならないと言つてしまえばいいのに、「いやあ、苦吟しますわ、ハッハッハ」だもんね。心優しい田川さん曰くは、「もう、締め切り過ぎてもうてるけど、サイトちゃん、タイの映画のアテレコやってるんやて？ 聞いたでえ。」「あ、あれね、大変苦勞してやってます。」「そのあたりをパッと書いてくれへん？ 苦勞ついでに、どや？」この後の俺の言葉は喋っている俺自身が吃驚している無謀な代物だつた。「成程、やってみましょう。第一、タイの映画を全く知らなかった俺には、このアテレコの体験はなんというか、

かさだかではないけど、俺は、俺達日本人の役者には足元にも及ばない演技の説得力のようなものを感じたね。だつて、そりやそうだ。現実の状況に対する生々しいリアクションとして彼らは演技というものを具体化してるんだから。俺達日本の役者は、その現実の状況、例えば今日なら今日ということに対するリアクションとして演技する、ま、虚構とか作り物とか言っちゃ演技という時間稼ぎをやつとるわけだ。俺が、彼らにアテレコをやりながら役者としての競争心みたいなものを失なつてしまひ、有光さんには非常に失礼だけど、あまり、アテレコに集中しないで、画面そのもの、内容そのものを観ることに集中していたということをお白状します。いいんじゃないですか？ アテレコでなくても。それと、これを録音したこのスタジオの凄さといった

やっぱり一種、自分というステロタイプの日本人が如何にアジアというカテゴリーでもって物事を考えていなかったかということが暴露されて行くプロセスでもあるわけだし。やりましょう、明日迄に。」

タイの映画、「ウボンからの手紙——周辺の人びと」のアテレコの話ははじめ八巻さんからあつて、この映画の日本での上映運動のリーダーというかなんというか、そこら辺に位置する有光健さんに紹介されて、ま、それで、やることになったということで、又々、俺の安請け合ひではあつた映画はちやんと日本語の字幕があるのだから、このままでもいいと思うけど、もっと微妙なやりとりみたいなものも出したいし、タイではまだ弁士という職業が存在している沢山の弁士がいるらしく、一人でいろいろなキヤラクターを喋り分けているらしく、それを俺にやってみてもらいたいらしいことが段々と分つて

ら!! これは市ヶ谷の自衛隊の正面近くにあつて、このスタジオは本来、ロックスの類いを録音したり、稽古したりする所らしく、設備自体かなり悪く、部屋全て小さく、どの部屋にもドラムセットあり、隣のロック騒音聞え来たり、馬鹿みたいな気持になるのをぐつと耐えて画面見れば、なんととはなしに貧しいはずのタイの田園、タイの夕陽、バンコックの出稼労働者のおじさんの顔の方が今ガンガン聞こえちゃつてくるこの日本の若者の、絶望的な雑さ加減よりはるかに豊かであることに気付いた。俺には、彼らのどうしようもない音達がああ走るパチンコ屋の音達とだぶって来てしようがなかった。俺は、突然ですが、永井荷風のふらんす物語を思い出した。

斎藤晴彦

ぼくが作った本

いまや、金木犀は満開で、見てるとむずがゆくなるようなオレンジ色の花が、まるで厚化粧の女のように、いやがうえにも臭い立つ。ちびのさくらに言わせるとキンモクセイとなる。

●ロボット社会の管理と支配、鎌田慧、青史社、定価一四〇〇円。ここんとこ鎌田さんの本は月刊ペースで出てくる、たいへんなことだ。タイポグラフィック、例によってカバーにコピーを要求する。超管理社会の問題は機会と人間のどちらが奉仕するかだ。

●松平容保のすべて、網淵謙錠、新人物往来社、定価二〇〇〇円。

●国籍差別との闘い、年金裁判勝利への記録、在日韓国朝鮮人の国民年金を求めると金編、凱風社一八〇〇円。どうも私のタイポグラフィックもパターン化してきたようだ。あいたスペース

に自分の指紋を押し捺し拡大して使おうと思ったら拒否された。

●松浦三の仕事①マスコミのなかの天皇②戦争占領下のマスコミ③ジャーナリストとマスコミ、全三巻、大月書店、定価各二〇〇〇円。

●ヒトラー政権下の日常生活、ナチスは市民をどう変えたか、H・フォッケ、U・ライマー、山本尤・鈴木直訳、そしおぶつくす、社会思想社、定価二〇〇〇円。ゲッペルス宣伝相とヒトラーユーゲントの行進の写真をどちらも同じ明度ながら反対色でもある色で重ね合わせると、見たい方の絵が浮かび上るといふ仕掛け、見たくなければただのゴチャゴチャ。

●ハムレットと乾杯！、小田島雄志、堀内誠一絵、犀の本、晶文社、定価九八〇円。ハムレットとであってハムレットではない。ここんとこが微妙であって小田島さんの意気を感じさせる。堀内さんイラストもすつきりして

にも大へん協力してもらって、とにかく出来たでしょうか。

●農民ユートピア国旅行記、アレクサンドル・チャヤノフ、和田春樹、和田あき子訳、晶文社セレクトション 定価一二〇〇円。

●光のアートワーク、リブポート編集、某電器メーカーの後援による光のデザインナーの作品集のカバーデザイン。こんなむちゃくちゃな跳込みの仕事なんてあるだろうか。定価不明。

●男装の麗人・川島芳子伝、上坂冬子、文藝春秋社。定価一一〇〇円。まだこんなテーマの本があったのか、ちよつとびつくりした。満州国の亡霊がゆらゆら。上坂さんてのは変わった人だ、紙はアート紙、艶ありビニール貼り、色もなるたけ原色でピカピカに仕上がるようにと注文したそうな。

●気がつけば騎手の女房、吉永みち子、草思社、定価一二〇〇円。雑誌「優駿」に連載、エッセイ賞を受賞。タイトル

上々吉の仕上りだと思つたら、タイトルを黒ベタ白ヌキしたのがどうも葬式みたいだと言う人もいました。

●日常学のすすめ、アンデイ・ルーニー、井上一馬訳、晶文社、定価一四〇〇円。ルーニーさんはアメリカの鈴木健二さんみたいな人だそう、日常のこまごましたことにも一言ある人のよう、続編も出るとか。

●話は映画ではじまった、PART 2 女編、高平哲郎、晶文社、定価一一〇〇円。もちろん男編の続編。中味に登場する女優さんの名前をカバーに出すわけだが、ひとり落つこととしてしまつて気付かず印刷り上り、おおあわて、申しわけありません。

●音楽未来通信、三宅榛名、晶文社、定価一二〇〇円。小型ながら洒落た造本でいこうよ。天をアンカットで見返しの紙にコッて、しかも軽装版ということ、カバーの絵も見たこともないほど奇麗なものを使つてさ。三宅さん

どおり。通訳を夢みる女子大生があるうことか……。この本もイラストは堀内さん、ところがカバー用のイラストが手法が晶文社のハムレットとまったく同じ、まずいことになった、お願いして中の挿画から一点選ばしてもらいました。

●アフリカ紀行、ミオンボ林の彼方、伊谷純一郎、講談社学術文庫。

●女の仕事、今いちばん輝いている122のとらばーゆ、文藝春秋編、定価八八〇円。横文字の女性の仕事てのはいぶんあるんですね。

●おいしいフランス料理が食べたい、萩原葉、草思社、定価一二〇〇円。

●これまたイラストは堀内誠一さん。今月の月間MVPといったところ。さすがにフランスものは上手、しかしながら食物についてなんだか言う本はどうもね、反感が先に立つんだ。

●街を読む、ソウル、榎本美礼、ワイルド・フォト・プレス、定価九八〇円。

これは以前からやつてるシリーズの一冊、旅行案内の変種。柳生弦一郎の絵。●バーボン・ストリート、沢木耕太郎、新潮社、定価一〇〇〇円。小説新潮に連載中から小島武のイラスト付、小島武については稿を改めて考察してみたいとも思うがめんどろな気もする。とにかくなぜあんなに大きな絵を描くのかだいたいトレスコピーに入らないではないか。だがまてよこの辺にも、この男の秘密がかくされているかもしれない。これが社会に立向う方法なのかもしれない。

●セクション・トック、山下洋輔、新潮文庫。以前冬樹社から出てたと思うなんか暗いカバーで、というわけで、ド明るくゆきたいということ、柳生平野のコンビ以外にはないだろう。仰せのとおり。

●特高警察体制史、社会運動抑圧取締の構造と実態、萩野富士夫、せきた書房。定価不明

平野甲賀

わるいくせ

9月23日、カラワンのストラチャイとモンコンを大阪空港までむかえにいく。到着ずみの赤いランプが点滅してから一時間近くたっても彼らふたりの姿はいつこうにあらわれない。もしかしたら乗っていなかったのかしら、と不安になったころ、入管の人にヤマキミエさん、と呼ばれた。タイからきてる人がいるんですけどね、ちよつと問題がありますから中へはいつてくたさい。その人の後にしたがってくらい廊下をあるき、入国審査室にたどりつくと、ふたりの疲れきった姿がそこにあった。観光ビザで興業活動はできないというのがもめていた理由らしく、ことしは去年とちがつて、交流が目的であり、そのために演奏をするので興業とはまったくちがうことを説明し、一時間ほどでなんとか入国をみとめられた。ど

だろうし、同じ世代の(たぶんね)作家同士を紹介できるのはうれしい。

タイではね、詩をひとつ書いて、もうお金は2百バツぐらい。だけどそれに曲をつけて歌にすると3千から5千バツになる。作家として生計をたてるのはほとんど不可能。今いちばん人気のある仕事は映画づくりかな。

ふたりで演奏するときは、事前に練習する必要がないから楽だけど、負担は大きくなるから疲れる。でも今度のような農村をまわる旅なんかにはふたりのほうがいいね。大きなコンサートになるとふたりじゃ無理なので、トングリーンやウイラサクといっしょにやることになる。ひとりでもカラワン、ふたりでもカラワン、4人でもカラワンさ。

ふたりで演奏したいちばんあたらし

うしても、もめごとは彼らにつきまとう。いつもそうなので、文句を言いつつ楽しんでしまうことにもなる。せっかく久しぶりであうんだから、もうすこし美しい再会の場面があってもいいのにね。全員でぐずぐずに疲れて、気分がでない。「世界中の女性と愛してしまおう」ストラチャイに、きれいになったなどといわれても、特別の感慨がわくわけじゃないけれど、彼の女性に対する熱意がかわらないのには脱帽してカンパイ!というこう。

カラワン農村漁村キャラバンがはじまる前に、松本と黒姫にあそぶ。松本駅で、去年コンサートをきいた高校生と偶然あつて双方で感激。

北アルプスをみながら、山は見ているだけだと近くにあると感ずるけれど頂上まで登ろうとおもったら、それは遠いものだ。もしかしたら永遠にたど

いカセットは1万部でている。その前の「鉄を打つ人」は5万までいったかいかないか。「人と水牛」は10万以上うれている。

あら、じゃあ、だんだんうれなくなっているの? とわたし。そうじゃなくて、人と水牛は政府に禁止されたりして問題になったから、そういうことがあると人がよろこんで買うんだよ、とモンコン。

やっぱりもめごとといっしょに生きているのだ。

東京についた日、うちの客間にねたら、夜中に幽霊がでて全然ねむれなかつた、あの部屋で死んだ人がいるんだろうといわれた。さて、今まで何人もの人が同じ部屋にとまったけれど、そんなはなしはきいたことがない。おぼけはうちの部屋にすんでいるんじゃないやなくて、ストラチャイ・ジャンティマトンその人にとりついているのである。本人が気づいていないだけだ。

りつかないかもしれないとおもわれるほど遠い。だから山は希望ににている。新しい社会もおなじだ。とストラチャイ。

黒姫は矢川澄子さんの家。矢川さんを見てみると、スワンニー・スコンターをおもいだすという。タイでは彼女のように女ひとり仕事をし(雑誌を出したり小説を書いたり)ひとりぐくらすのは、むずかしいし危険でもある。それが証拠に彼女は殺されてしまった。その4、5日前にいっしょにお酒をのんで酔っぱらい、ダンスをしたのが最後のおもいで。よい先輩、友だちだったから、彼女の雑誌のために詩を書くこと、ふつうの5倍はお金をくれた。そういう意味でも友だちをうしなうのはとても残念。12月になったら友だちのカムシン・シーノークという作家が日本にくるかもしれないと言っていたから、そうしたら彼もいっしょにまた黒姫にこよう。もうそのときは雪も深い

こんどの旅で通訳をしてくれることになった留学生のシントーンくんは横浜であつて打ちあわせをしてからぞろぞろ中華街まで行き、中国製の胡弓をモンコンが買った。4千2百円。ついでに5百円で紅い星のついた帽子も買いい、ソーシャリスト・ツアー・イン・チャイナ・タウンなどといって満足顔。帰りに渋谷に寄ると、ハチ公の裏側で「大道芸人青空舞踏公演」がちょうどはじまるところで、人垣をかきわけて最前列にしゃがんで観る。タイの大道芸人といっしょにみると、日本の大道芸人は、たいそう孤独にみえた。

モンコンのお母さんは剃髪したがっているそう。おもしろいからうことなく、幸福に生きたいからだという。

八巻美恵

下手の横吹き笛日記

ここところ、毎日、ズルズルと生活をしていて、何かに集中してやるという習慣がなく、ごくたまに仕事をしに行っても、心なしか音も遠くの方で鳴っているし、楽器も体になじまないという具合です。でもそろそろ夏休みも終りにして、何とかしないと、思いついて始めようかなんて、考えようとして毎日グダグダとしているわけなんです。

八月二十二日、大久保タバックスタジオ、映画のダビングスタジオの様な古い小さなスタジオで東映のまんが映画の録音、どうも最近はこの業界も不景気でチェロ、フルートとシンセサイザーの三人だけ。

八月二十三日、どうも楽器を吹く事に、御無沙汰していたので、人の口で吹いているような感じで、具合が悪く、トレーニングの為一日練習をしている。

前から作曲をし、今もって現役で活躍し続けているわけですが、歩行もともすれば危いという状態で仕事場に来られると、とに角、一所懸命やりましようという気になるものである。

八時から日活スタジオ、青木望さんアレンジで「日曜はダメよ」、こった編曲面白い。

九月四日、六時半から千代田公会堂全斗煥来日阻止の集会、めずらしく満員、悠治さん、美恵さん、私の三人で出演。

九月十日、今月の二十七日に演奏する、R・ミツチエルという黒人の作曲家の「ノーネア」という曲の練習の為、東京音大へ。フルート、ファゴット、ピアノの曲であるが、曲は悪くなさそうなのだが、いかんせん、演奏が難かしく、とても今月の末には間に合いません。もうやることにします。

九月十一日、一時から、都倉俊一さん作曲の映画音楽、アバコスタジオ。

最近、一日中吹くという事がなかったためか、しんどくなっていけない。

八月二十四日、昼からワセダアバコスタジオ。三時からサウンドシテイースタジオに行き、CMの録音。夜七時からビクターで創価学会の何やらどてかい、世界大会があるとかで、その祭典の為の音楽を録音する。その曲の題名も「人間革命」とか「何とか誕生」とかそれ風のものばかり。フルオーケストラでえらくお金のかかった録音。お金持だなあ。

八月二十五日、又々、今日も朝から創価学会の大会の仕事。八時間も一つのスタジオの中で仕事をするとするのは結構大変なものなのです。多くの仕事の場合、制作とは全く関係のない所におかれ、仕事がどのように進んでいるのかもわからず、どの位の出来かもわからないというようになって、そこに出された譜面を上手に吹けば良いのです。勿論そうではない仕事もあり

九月十二日、十時半から、オカリナでCMの録音、オカリナというのは、演奏するのに難かしく、(しつかりと吹くのは)、断つただけれど、人がいないらしく、くどきおとされる。まあやってみれば、どうということはないのだが、何となく気がのらない楽器である。

九月十三日、三時半までNHK502で仕事。後、三宅榛名さんのお宅へ。十月一日のハーモニカの崎元さんのリサイタルの打ち合せ。又々色々な楽器をやることになりそう。

九月十四日、大久保の海洋会館で、フルート、オーボエ、ファゴット、チェムバロでコンサート。テレマンのトリオソナタ二曲、クワンツ一曲、フレスコバルデイの組曲、じゅうたんを敷きつめた大広間で、残響全くなし、の場所、管楽器にはつらかった。今度はどこか教会のような響くところでやりたい。

ですが、一笛吹きという立場には変りなく、そう言う面では気楽でもあり、ちよつとつまらなくもあるわけなんです。

九月一日、三浦三崎の諸磯港からタイ釣りが出る。早朝五時に出航、潮が悪くて小さいのが一枚つれただけで、カワハギをつるがこれもダメ。子供の頃は、たらい一杯のイサキとか、バケツ一杯のアジなどがつれたように記憶しているが、もうこういう事はないのだらうな。いつ行っても潮が悪く、本当に魚がいなくなったなあ。

九月二日、二時からNHK509ST。悠治さん、三宅榛名さん、美恵さんと私でインドの大道芸人の絵に付ける音楽の録音、ケーナ一本で、悠治さん上手に書く。

九月三日、NHK503ST、古関ユージさん作曲、日曜名作劇場という番組、古関さんは、もうすでに八十前後のお年ではないかと思われるが、戦

九月十五日、NHK707STでリハーサル。パガニーニ作曲の室内楽、少し編成が大きくなると、もう全員がそろわず、何の為の練習か。

九月二十日、十時からアオイススタジオ、PR映画の録音、夜六時からNHKで、毛利蔵人さん作曲で学校放送の音楽。

九月二十一日、昼間、三宅榛名さん宅で練習し、夜、NHKで練習、帰って来ると、知人より電話があり、小さな芝居の音楽を書いてほしいとの事、毎度の事であるが、予算が少なく、作曲家にたのめないの、せつばつまつて私のところへ来たらしい。作曲などしたこともない訳だが、何となく面白そうでもあり、やってみたくもあり、出来なさそうでもあり、さてさて、どうしたものか。という訳で今回はこれまで。

西沢幸彦

友だちと呑めば本になる

ワープロを友人に貸した。私の部屋からワープロが消えた。

一年まえ、はじめて自分の机のうえにワープロを据えたときは、一か月ほど、寝食をわすれて熱中した。そとで酒をのんでいても、早く部屋にもどつて、あの灰色の機械のまえにすわりたくてウズウズしてくるのだ。たまたまいあわせたカラワンのだれかが、そんな私の様子を見ていった。

「おやおや、これもコンピュータね。駅でも銀行でもエレベーターのなかでも、日本人はいつもボタンを押してるね。もしアジアで核戦争がはじまったら、こんどこそ日本の勝ちよ」

この相当な皮肉を、ほほう、そんなものですかなとききとばして一年後、私の部屋からワープロが消えてなくなった。思いがけないことに、いま私はものすごい解放感を味わっている。そ

の解放感のふかさは、一年まえ、はじめてワープロが私の部屋に出現したときの熱中のふかさに優に匹敵する。

思いがけないことに、と書いた。まさにそのとおりなのだ。

当初の熱中がすぎると私は機械になれ、それからほぼ一年のあいだ、ごく当りまえの日用品のひとつとしてワープロを使用してきた。とくに眼がつかれるというようなこともなかった。だから友人にそれを貸したときも、となりの住人にちよつと鍋を貸してやる程度の軽い気持だった。ところが、どうです。まるで骨のズイがとろけてしまふような解放感のふかさなのだ。そとで酒をのんでいても、早くワープロのない自分の部屋にもどりたくてソワソワしている。

この解放感、いまも私の心身が健康でありつづけていることとしるしてある。そういききつてみたいところだが、いくぶん不安でないこともない。

人間は、いつものお鍋が存在していないというだけのこと、こんなにも熱烈に家に帰りたくなるものなのかしらん。

荻窪八幡通りにある瑞鳳という台湾レストランをのぞいたら、若い女主人が「これッノさんにそっくりだよ」と壁に貼ってあった京劇かなにかのヒゲ將軍のポスターをくれた。私の顔は、まるで昔の中国人の顔みたいなのだ。うだ。いい気持になって安物のコーリヤン酒をのみつづけ、かなり酔いがまわつたところで、ポスターにしるされた白ぬき文字に気づいた。

「李白一斗詩百篇

長安市上酒家眠」

なんだ、つまらねえ。勇壮なヒゲ將軍ではなく、彼女がいったのは、ッノさん、昔の中国の呑んだくれにそっくりだということであつたのか。詩百篇はなし。一斗酒だけのまがいの李白セ

ンセイだ。

レストランといっても、L字型のカウンターに十人もすわれば満員になってしまう。そんな屋台みたいな台湾料理店が、この夏、住宅地域のちいさな商店街のまんなかに出現した。片言の日本語をしやべる女主人と、日本語をまったく解さないその妹。いまは帰国してしまつたが、開店当時は、台北で電気職人をやっているという彼女たちの父親が応援にきていた。おじさん、なんで「瑞鳳」という名にしたの？ときくと、こんな答えが達者な日本語でもどつてきた。

「上の娘の名前なんですわ。つけたあとで日本の航空母艦の名前だったことに気がついて、しまつたと思つたけど、もうおそかつたですよ」

お向いの荻窪はえぬきの酒屋や、兩どりの喫茶店やソバ屋の人たちが、この新来の娘たちをもちたてている。天沼陸橋の手前を左にはいって、ポロ

ン亭のすぐとなり。実家の近くに住む行商のおばさんに製法をおそわつてきたという「これ台北一よ」のチマキがおすすめ品。ソーセイジやモツ類もわるくない。

粉川哲夫が、代々木駅のすぐそばにある「アンコールワット」というレストランにつれていってくれた。いわゆるカンボジア難民たちがやっている、これまた屋台に毛がはえた程度のちつぽけな店だ。デコラ普請の店内はまだやすっぽいままだが、やがて油やニコチンで黒ずみ、いかにも東南アジアの食いの屋らしい貫禄をただよわせはじめることだろう。

いちいち「辛いよ、大丈夫？」とこたわつてから、ポツリポツリと皿がはこばれてくる。牛肉サラダも野菜も焼きソバも、なるほど辛い。野菜がくさんのカンボジア風春巻もいい。そのソースがまた辛い。辛くて、うまくて、

安い。五時すぎにはいったときはすいていたが、三十分後には立つて待つている人たちが数グループいた。

いろいろむずかしい議論もあろう。それでもわれわれが住む町で、台湾の娘たちにせよカンボジアのおじさんにせよ、日本人だけではなく、ほかのアジア人たちがちいさな商売をがんばつてやっている、やることのできるというのは、やはりいいことだと思ふ。ひとつの町に、さまざま、安くてうまいエスニックな食いのものが混在する。そうなれば――

「食いのから天皇制がくずせるかもしれないね」

唐芥子で熱くなった舌をつきだして風にあてながら、そう粉川哲夫がいった。ハーハーハー。きみもなかなかやりますな。この痛い舌で、とうてい私にはモノをくつちやべる余裕などありませんのですよ。

津野海太郎

編集後記

今月から、この通信の編集を手伝いたいという奇特な人(?)があらわれた。水牛楽団を手伝っていた沖縄の国吉保くんの友人で、柏木千春さん。早速校正を手伝って貰った。短大を出た21歳のお嬢さん。テキスタイルの会社にいたが、止めて編集の仕事ができる会社を目下探している。

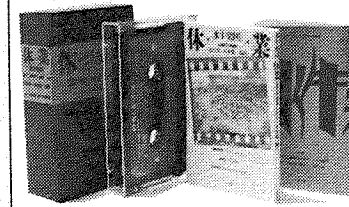
「水牛通信」でない仕事で柳生弦一郎さん宅を訪ね、まち子さんからかの女のお祖父さんの話を聞いた。自転車博覧会へ行って、その場で自転車が欲しくなり、乗り方もわからないまま買って、20キロの道を押しているうちに乗り方をおぼえたとか。その子、つまりかの女の父は、祖父への反動でもの静かな人になったとか。とすれば、まちさんは?

なお、先月の編集後記に誤りがあった。ジャマイカで「ボデイ」と呼びかけられたと思っただのは「バデイ(Buddy)」つまり「大将」のジャマイカ訛りとのこと。いよいよ英語にヨワイところが暴露されて、ひとしきりおち込んでしまった。それを指摘してくれたのは、シスコから来日してぼくのところに居候のローレンス・ジェイ。

(田)

熱烈ファンである浅田彰と坂本龍一による「水牛楽団」徹底解説!!

休・業 [水牛楽団] CASSETTE BOOK 浅田彰+坂本龍一編集



10月1日発売 定価2000円

「水牛楽団」は解放されたか? 高橋站生 私の「高橋悠治」体験 如月小春 「水牛楽団」高い塔の歌」カセット50分 I 不滅の水牛名曲選 水牛楽団 II こぼれあそび・こえあそび 如月小春+DOLL III 高い塔の歌 水牛楽団+如月小春

【解説】水牛楽団】ブックレット2分冊
SYMPHONIUM 高橋悠治+八巻美恵+浅田彰+坂本龍一
DIALOGUE 浅田彰+坂本龍一
NOTES 編集部編
年譜
「水牛楽団」は解放されたか? 高橋站生
私の「高橋悠治」体験 如月小春
【水牛楽団】高い塔の歌」カセット50分
I 不滅の水牛名曲選 水牛楽団
II こぼれあそび・こえあそび 如月小春+DOLL
III 高い塔の歌 水牛楽団+如月小春
【通信販売】
御希望の方は現金書留で「休業購入」と明記して2000円を同封の上、下記へお申し込み下さい。折り返しお送りいたします。(送料小社負担)
株式会社本本堂「休業」係宛
〒102千代田区九段北1-2-2-305 電話(237)9189

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。
口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。
*本誌は次の書店にあります。
模乗舎(新宿) ☎三五二一三五五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三四九六一
ワンラブブックス(下北沢) ☎四一八一八三〇二
アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
名古屋ウニタ書店 ☎七三二一三三八〇

水牛通信 第六巻第十号
一九八四年十月十日 定価 二〇〇円
発行人 堀田正彦
発行所 水牛編集委員会
〒154東京都世田谷区新町2-15-13 八巻方
電話〇三(四二五)九六五八
振替口座東京四一九一七九二
印刷所 (株)トライプリントショップ